

中級英語学習者の TEAP プレイスメントリーディングスコアの変化と

英語ライティング学習の関係性について

<概要>

英語習熟度が中級の学習者群(以下 M 群)と中上級の学習者群(以下 UM 群)の三ヶ月の英語学習が TEAP プレイスメントテスト(以下 TEAP-P)のスコアでどのように変化するのかを調査分析した。

二つの学習者群は習熟度や学習環境が異なっているにもかかわらず、英語学習、特に英語ライティングに取り組むことで英語の持つパラグラフの構造的な気づき生まれ、英語を読む感覚が身についたというインタビュー結果があり、実際 TEAP-P の Reading スコアが向上した学習者がいたことが分かった。

<はじめに>

大学生の日常的な英語学習がどのように学習者の英語力に影響を与えているのか、このことは大学英語教育にかかわっている教員、研究者すべての関心事である。今回 TEAP-P 開発の一環としてどのように大学生の英語力測定にこの TEAP-P が利用できるかということを考えるため、2つの学習者群を対象に三ヶ月の英語学習の変化がどのように TEAP-P のスコアに現れるかをスコアの変化と学生へのインタビュー調査をもとに分析した。特に今回対象とした学生がこの三ヶ月間で多くの英語ライティング活動を行っていることから、英語ライティング学習が TEAP-P のスコアにどのように現れるかに着目した。

ライティング学習はリーディング学習と関係が深いと従来から指摘されている (Belcher & Hirvela, 2001; Hirvela, 2004)。例えば 103 本のリーディングとライティングに関する論文メタ分析研究を行った Graham & Hebert (2010)の冒頭に以下のように言及されている。

One often-overlooked tool for improving students' reading, as well as their learning from text, is writing. Writing has the theoretical potential for enhancing reading in three ways. First, reading and writing are both functional activities that can be combined to accomplish specific goals . . . Second, reading and writing are connected, as they draw upon common knowledge and cognitive process . . . Third, reading and writing are both communication activities, and writers should gain insight about reading by creating their own texts.

Graham & Hebert (2010, p. 4).

ここで Graham & Hebert はライティングがリーディングを促進する要因として三点言及し、第一に「リーディングとライティングが両方とも特定の目的を遂行するために組み合わせができる機能的活動」であり、第二に「リーディングとライティングは共通の知識や認知過程を活用するため関連性があり、そして三番目に「リーディングとライティングは両方ともコミュニケーション活動

で、書き手は文章を作り出すことによって読むという活動についての洞察を得るはずである」とされており、英語ライティングの練習がリーディング力に転化することが期待できる。今回の研究ではこれらの研究に基づいてライティング学習の成果をリーディングスコアの変化に着目して考えたい。

<研究課題>

本研究の課題は、現在二種類ある TEAP-P（以下 A 問題、B 問題とする）を三ヶ月の期間を空けて被験者に受験してもらい、その間の英語学習がどのように TEAP-P のスコア変化と関係しているかを調査・分析する。

【被験者】

今回被験者は下記の二つの学習者群である。

M 群：私立文系大学 2 年生のアカデミックライティング授業受講者の 2 クラス（A クラス 14 名、B クラス 13 名）合計 27 名

UM 群：私立文系大学 4 年生で米国に長期留学中の 6 名

【期間】

期間は下記のようになった。

M 群：1 回目は 2022 年 10 月 17 日に受験。
2 回目は 2023 年 1 月 16 日に受験。

UM 群：1 回目は 2022 年 10 月 20 日～10 月 26 日の間に受験。
2 回目は 2023 年 1 月 23 日～1 月 26 日の間に受験。

M 群は、2 回とも佐藤のライティング授業時間を利用して受験を行った。一方、UM 群は 1 回目が全員米国留学中であったため指定した期間中にオンライン受験してもらい、帰国後の 2 回目は 4 名を大学内で受験してもらい、他 2 名は自宅で受験してもらうこととなった。

【3 ヶ月間の被験者の英語学習状況】

M 群

M 群は 2 年次の学習者群のため大学の必修科目の英語授業が多く、どの学生も一週間に 5 コマの英語授業（Reading、Writing、Oral Communication の 3 コマは必修でその他選択必修の英語 2 コマ）を受講している。今回この TEAP-P の研究を実施したのは佐藤が担当している必修科目のアカデミックライティング（授業名：Writing for Communication IV）であった。またこの M 群の学生はすべてこの三ヶ月の期間に、授業のライティング課題として 1,000 words 以上のリサーチペーパーの作成にとり組んでいて、その課題では佐藤とドラフト原稿をやりとりしながら Introduction、Literature Review、Method、Results、Discussion、Conclusion で構成された英文ライティングを行っていた。

UM 群

全員がコロナ感染予防のため本来行く予定だった 3 年次の海外留学に行くことができなくなったため、4 年次で米国留学していた学生に参加してもらった。それぞれの学生は米国の異なった大学に 2022 年度前期から

留学し、本研究で第一回目の TEAP-P 受験は留学先で受験した。2022 年 12 月末までに全員留学を終え、帰国したため年明け 2023 年 1 月に 2 回目を大学、あるいは自宅で受験した。UM 群全員が 2022 年後半に現地で学部授業を履修し、ちょうど研究対象とする三ヶ月間はその学部授業を受講していた。留学先の学部授業数はそれぞれ 3~4 科目で、予習に 1 科目テキスト 30 ページほどの予習が必要で、どの授業も期末には 2,000~3,000 words のレポートが必須となっていた。

【被験者の英語力】

被験者の英語力を国際ビジネスコミュニケーション協会が公開している TOEIC スコアレベルとコミュニケーション能力レベルとの相関表に基づく下記のような状況であった（国際ビジネスコミュニケーション協会, 2012）。

M 群：TOEIC スコアで $M=612.9$ ($SD=72.7$) であり、C レベル (470-730) に相当する。

UM 群：TOEIC スコアは $M=807$ ($SD=69.0$) であり、B レベル (730-860) に相当する。

<結果と考察>

【スコアの変化】

まず M 群の 2 クラスの TEAP-P のリーディングとリスニングのテストスコアの平均と標準偏差は以下ようになった（表 1）。

表 1 M 群のスコアの平均と標準偏差

	TEAP-P	Reading		Listening	
		M	SD	M	SD
A (N = 14)	1	55.4	7.5	51.9	9.1
	2	56.5	12	57.2	9.6
B (N = 13)	1	51.5	7.1	48.4	6.7
	2	47.8	7.1	53.5	8.2

M 群では B クラスのリーディングが 2 回目の平均が下がっているが、それ以外はすべてスコア的にあがっていた。特にリスニングに関しては二クラスとも大きく伸びていることが分かる。

次に UM 群の 2 クラスの TEAP-P のリーディングとリスニングのテストスコアの平均と標準偏差は以下ようになった（表 2）。

表 2 UM 群のスコアの平均と標準偏差

	TEAP-P	Reading		Listening	
		M	SD	M	SD
UM群 (N = 6)	1	68.2	6.57	71.5	12.1
	2	72.8	5.61	78	9.5

UM 群ではリーディングもリスニングも伸びていることが分かる。

このようなスコア変化の要因が何になるかということを経験者にインタビューすることで確認をした。

【インタビュー調査】

本研究では英語ライティング学習と TEAP-P のリーディングスコアの関係性を確認したいため、スコア変化で大きく上昇した三名の学習者（学生 A、B、C）とスコアが低下した一名の学習者（学生 D）にインタビュー調査を行い、何がリーディングスコアの変化に影響したかを確認した。

M 群

M 群の学生 A はリーディングスコアの変化が「56→71 (+15)」で、この TEAP-P でスコアとともに算出される CEFR レベルでは「B1→B2」とアップした。学生 A になぜリーディングのスコアが上がったか理由を聞いたところ、下記の点を挙げていた。

「英語のアカデミックライティングで英文の構成を自分で作ることで書き手の意図が分かるようになり、そのことで読むときもポイントをおさえやすくなった」

「英語話者の先生の授業で英語で考える必要が多く、そのことが全体的な英語力の向上に繋がったような感じがする」

また同様にリーディングスコアの変化が「61→71 (+10)」であり、CEFR が「B1→B2」とアップした学生 B は下記のように回答していた。

「Literature Review を書くことでオリジナルの英文を自分の言葉にする練習になった」

UM 群

UM 群でリーディングスコアが「63→81 (+18)」と変化し、CEFR も「B1→B2」とアップした学生 C は下記のような回答であった。

「留学先ではもちろんすべて英語でアカデミック活動を行う環境だったので、リーディングにしても、リスニングにしても自然と何がポイントとなるかを考えながら解

いていた」

「学部授業のリーディングやプレゼンテーションを通してグラフなど図表を読み取る力がついた」

「大量にアカデミックライティングをすることで、リーディングで読むポイントが明確になった」

以上 M 群、UM 群でリーディングスコアが上がった学生のインタビュー回答に共通していたのは英語ライティングをすることで英文の持っている構造や特徴が分かり、そのことでどのような流れで著者がその英文のポイントを述べようとしているかが分かったということであった。

一方、唯一リーディングスコアが下がった M 群の B クラスの学生 D に思い当たる原因をインタビューして聞いてみたところ下記のような回答であった。

「時間配分がうまくいかず、最期の方の問題は勘で解答した」

これが偶発的なものか、他に何か問題があるかどうかは今回の研究では焦点を当てておらず、判別することは難しいところである。

以上英語ライティングとリーディングスコアに焦点を当てて今回のテスト結果の分析を行った。リスニングに関してもインタビューでは言及してその要因について調査したが、上記の留学生の学生 C が留学先のためすべて英語でやりとっていたのでそのことがリスニング力の向上に影響があったのではないかと指摘する以外その他の学生

から特に言及はなかった。

その他

このインタビューでリーディング、リスニング以外に聞くことができた特徴のある回答は以下のようなものがあった。

はじめに M 群の学生 A がこの TEAP-P が大学生の習熟度を評価するのに妥当なテストだと感じた点について「大学ではじめて知った英単語が出てきたので、大学生の習熟度テストとして役立つと感じた」という点を挙げていた。

また UM 群の C さんが留学先で英語で生活していたことを踏まえて、「TEAP の問題で留学先の会話とつながるところがあり、分かりやすいところがあった」と答えてくれていた。

<結論と今後の課題>

今回英語習熟度が中級と中上級の学習者群を対象に TEAP プレイACEMENTテストのスコアがどのように変化するかを調査分析した。三ヶ月の英語学習でおおむねスコアは上昇し、英語学習の成果がスコアに現れている結果となった。スコアアップの詳しい要因の調査としてインタビューを行い、その結果英語ライティングがリーディングにプラスの効果を与えたことが分かった。

今回の調査分析では、条件などを統一できなかったこともあり、結果の客観的妥当性を十分確保できなかった。このことを踏まえて、これから TEAP プレイACEMENTテストの調査を行う上で条件などを整備し、より客観性を確保した調査分析を行ってきたい。

<参考文献>

Belcher, D., & Hirvela, A. (2001). *Linking literacies: Perspectives on L2 reading-writing connections*. Ann Arbor: University of Michigan Press.

Graham, S. & Hebert, M. (2010). *Writing to Read: Evidence for How Writing Can Improve Reading*. New York: Carnegie Corporation of New York.

Hirvela, A. (2004). *Connecting reading & writing in second language writing instruction*. Ann Arbor: University of Michigan Press.

国際ビジネスコミュニケーション協会

(2012). *Proficiency Scale TOEIC スコアとコミュニケーション能力レベルとの相関表*.

https://21606703.fs1.hubspotusercontent-na1.net/hubfs/21606703/library/default/toeic/official_data/lr/pdf/proficiency.pdf